
壁壊しレイバーの話

霧途雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

壁壊しレイバーの話

【Nコード】

N4747J

【作者名】

霧途雲

【あらすじ】

壁壊しは寒空の中に立っていた。吉村は彼の言うリンゴの意味が分からなかったが、結局はリンゴ退治に付き合うことにした。第一、壁壊しが何なのかもまだわかっていないじゃないか。

壁壊しレイバーの話

もしかするとご存知の方もおられるかもしれませんが、皆さんの中には壁壊しレイバーの存在について知っている方はいらっしゃると思いますか？すでに見たことや、会ったことのある方も少なくないことと思います。知ってのとおり、壁壊しレイバーはどこにでも現れますものね。本当にどこにでも、ね。

ですからこれからお届けするお話はなににも大勢に向けて声を張り上げるようなものじゃあないんです。寧ろごく少数の方、つまり、壁壊しレイバーについてあまり詳しく知らない方、あるいはそんなものの存在については聞いた事さえないというような方にこそ、私はお話ししたいと思っております。ええ、もちろんお話の途中で馬鹿馬鹿しくなってしまうかもしれませんが、その時は即刻この場を立ち去っていただいて結構ですよ。やり残した学校の宿題や、作りかけの晩御飯の続きに取り掛かった方が断然、人生においてはお得な時間の使い方ですもの。ではここで少し時間を置きますから、この時点ですでに退屈だと思いなさった方はどうぞ、遠慮なさらずにお帰りください。…。

さてと、だいぶ静かになりましたね。個人的にはこの方がやりやすくていい。ではお待たせしてすみませんでしたが、いよいよ本編に入りたいと思います。この薄っぺらな冊子に収められたお話は実は完全ノンフィクションなんですけれど、なにぶんファンタジックな出来事ですから、ちょっと疑わしく思える箇所もあるかと思えます。まあ信じるかどうかは皆さんにお任せするとして、私はこれを「完全ノンフィクション」という形なるべくありのままにお伝えすることに専念したいと思います。では、さっそく朗読させていただきます。始まり始まり。

*

アメリカ資本主義による世界規模の金融ギャンブルが大失敗し、その負の波及効果をうけて世の中には失業者が爆発的に増えた。大企業の株価暴落に伴って投機マネーが原油先物市場に流れ込んで溢れかえり、今度は穀物市場にまで手を出して穀物価格は高騰する。飢餓に苦しむ途上国では、海の向こうで横行していた下らないマネーゲームのリレーについて全く知らないまま、まるで迷子の流れ星のように儚く尽きた命も少なくない。とか、難しくて堅苦しい表現はいくらでもできるけれど、要するに世界中がくたびれていましたとき、というそれだけのことだ。

男はそんな時代にいたので、本来なら物語の主人公としては役不足だった。つまり男はありふれた就職難のど真ん中の被害者のうちの一人にすぎなかった。

十二月の寒い夜道を吉村はスーツにコートの格好でとぼとぼ歩いていた。吉村は二十四歳で、就職活動の成果は全くの凍結状態だった。これといった夢を持たないまま二流大学の工学部に入ったが、その四年間の猶予期間でも明確な将来のヴィジョンを見いだせず、結局逃げ込むように大学院の道を選んだ。

その当時世間には求人が余るほどあったし、同じような進路選択をする仲間は工学部には少なくなかった。吉村は大学の講義には比較的熱心に取り組んだし、良くしてくれる教授にも恵まれていた。短い期間だったがそれなりの恋もいくつかした。しかしそれらがどれも短期間に終わったのは、とりもなおさず、吉村が将来的な展望に乏しいからだった。彼と付き合った女の子は皆、自分自身の将来にはつきりとした目標を据えていて、それに向けてあらゆる努力を惜しまなかった。彼女たちは最初、吉村の何となく無欲な感じに惹かれるのだが、そのうち彼の将来に対する楽観的な態度はだんだんと露見してきた。すると彼女たちの目には吉村がひどく奔放で考えの

ない風に映ったのだった。

彼女たちの予想は、ある意味間違っていないかった。時代は気がつけば大不況の渦中だったのだ。二十四になった吉村は「将来的な展望に乏しい」自分の運のなさを情けなく思い、この十二月の寒い夜道を下宿先のアパートまで歩いて帰った。壁壊しレイバーはアパートのドアの前に立っていた。

他人の家の前で身体を震わせながら立っている不審なその男は、吉村と同じかそれより一、二歳若く見えた。上半身は真冬だというのに緑色の長袖Ｔシャツ一枚の上からし色のロングコートを着ているだけで、下は安っぽいブルージーンズと汚れた白のスニーカーだった。手袋もしていなければマフラーも巻かず、腕を組んで体温が大气に奪われないように必死の様子だった。

「あの、すみませんがどうかなされましたか？そこは僕の家なんですけど」と吉村はおそろおそろ話しかけてみた。すると男は、

「吉村勇樹さんだね、ちょっと中へ入れてくれないか。寒くて凍え死にそうだ」と歯をがちが言わせながらこわばった声で言った。

「失礼ですが、どちら様ですか？僕の名前をどこで聞いたんでしょう？」と吉村は尋ねた。全く見覚えのない顔だった。

「俺は『壁壊し』』というのをしている。名前はレイバーだ。君の名前は会社の資料で手に入った」と男は事務的に答えた。しかしその簡潔な説明を聞いたところで話は一步も前に進んでいない。怪しすぎる。

「寒いところをわざわざ来ていただいて申し訳ないんですが、僕は学生ですし、セールスとかは全部お断りしてますから……」

「君の運命が勝手に歪められて悔しくないって言うのかい？」と壁壊しなる者は唐突に被せた。「君の知らないうちに君の知らない奴らが君のかけがえない物を奪おうとしているんだ。君はそれでも黙っていられるのかい？」

腹が立った。吉村は相変わらず構造自体に進展がない男との会話にまともに取り合う気はなかったのだが、運命だとかかけがえない

物とか、そういう抽象的でデリケートな個人の領域に、他人が無遠慮に侵入することに妙な屈辱を覚えたのだった。

「あのねえ、あなた失礼だと思いませんか」と吉村は強く言った。

「人の家のドアで待ち伏せして、いきなり中へ入れてくれないかって。拳句の果てに人の運命について説き出す始末だ。これ以上しつこければ、場合によっては警察に通報することになりますよ」

「警察」というフレーズを聞いて男の口元はぴくつと反射的に痙攣したが、そのあと男は眼の力を急激に強めた。吉村は男の瞳に自分の瞳を捕らえられた。それは物理的な力のようにありありと伝わった。吉村はまるで腕力で押さえつけられているみたいに、男の眼から自分の眼をどうしても離せなかった。

「確かにこのやり方は少し乱暴で礼儀にかけているとは思う。それは申し訳なかった。すまない。でもね、俺は下らんセールスをしに来たんじやないし、方法はこれしかない。人生を狂わせる 危険

から君を確実に避難させたいんだ。なぜなら君は一〇〇パーセント悪くないんだからね。何も悪くない人間が何かの被害者になるのは明らかに正しくない。そう思うだろう？でもこのままでは君も確実に飲み込まれることになるんだ。これからやって来る竜巻みたいな

危険 にさ。君は信じたくないだろうし、たぶん俺の言うことが馬鹿馬鹿しく聞こえているに違いないと思う。自分で言っているつもり。でも、悔しいけれどこれは現実的な話だ。『人はいつか死ぬ』っていうのと同じくらい現実的な事なんだ」壁壊しの真つ黒な瞳がきらりと光る。吉村の身体は原因不明の金縛りにあつたみたいに固まって動けない。壁壊しは白い息を惜しげもなく吐き出しながら言った。「俺は君を救いたい」

金縛りが解けて軽い痺れが全身に走った。吉村は少しだけ息が上がっていた。そして込み上げていた怒りは知らないうちにどこかへ昇華してしまったようだった。吉村は灰色のコンクリートの地面に目の焦点を合わせて、呼吸が落ち着くのを待った。それから目の前の男の瞳をもう一度のぞいてみた。男の瞳はもう元に戻っていた。

壁壊しは寒さで紫色になった唇の奥で歯をがちがちなせながら、それでもしつかり吉村をみつめて立ち続けていた。

「中へ入って下さい」と吉村は疲れた声で言った。しかしそれは何となくさつきより透明度のある声にも聞こえた。「お話くらいなら聞いても構いません」吉村は黒の四角いカバンのポケットから家の鍵を出してドアの鍵を開け、男を中に上げた。

「ありがとう。ちょっと失礼」と壁壊しは確かな声で言った。

「俺は二十二だから、年齢でいくと君より下になるね」リビングの安いカーペット敷きの床にあぐらをかいて、壁壊しのレイバーは言った。吉村は二人分のマグカップにコーヒーをいれて、折りたたみ式の小さな机の上にひとつを置き、自分も床にあぐらをかいてもひとつを両手で持ち、手のひらを温めた。

「それで、『壁壊し』っていうのは具体的にどういう職業なんでしょう？」と吉村は聞いた。どうも、と言って壁壊しはコーヒーを一口飲み、深く息を吐いた。

「これがなかなか難しい職業で、一口に説明できるものじゃない。だから理解してもらおうとなるべく手短に話そうとすると、さつき玄関先であつたような感じになってしまうんだ」

「そりゃ誰だつてあありませんよ。こちらに敵意がなくなつて、あなたは怪しすぎる」

「まあそれが一般的だと思う。難しい仕事だ」

「それで、どういう仕事をしているんですか？」

「わかりにくいのを承知で言うが、たとえば地球を大きな地面とするならば、壁壊しというのはその無秩序状態の地面を整備する工事現場のおっちゃんみたいなもんだ。ぼこぼこの地面を均して、余計な石を取り除いて、人が不自由なく通れる道を作るんだ」

「よくわかりませんね」

「そつだろつな。別の比喻を使うなら、壁壊しは二酸化炭素だ」

「もつとわかりませんよ」

「つまり、人間にとっては増え過ぎればかなり厄介で、室内においては暑苦しくて、ところがその生みの親は何を隠そう人間自身というわけだ。そして二酸化炭素は、全く存在しなければ木々の光合成を損なってしまう」

「『人間にとつては』って、まるであなたが人間じゃないみたいですね」

「まあそこはどうでもいい」と言って壁壊しレイバーはコーヒーを飲んだ。吉村も一口飲んで、カップのコーヒーをみつめた。

「さつき外であなたは」と吉村はしばらくの沈黙のあとで切り出した。

「レイバーと呼んで構わない。俺は君より歳下なんだし。俺の方の言葉遣いは変えられないけど。これはポリシーなんだ」とレイバーは言った。

「…レイバーはさつき外で、人生を狂わせる 危険 がどうか、僕を救いたいとか言っただけだった？ あれはどういうことなんでしょ… ということなの？」

「言葉の通りだ。このままいくと君は人生を狂わす 危険 に巻き込まれるんだよ。その竜巻に飲まれたら最後、命の保証はないね」

「具体的にどんな危険なのさ？ あなたの言うことは…」

「レイバーでいい」

「…レイバーの言うことは具体性に欠けてるんだよ。だからそんなものには説得力がないんだ。インチキ占い師の抽象的な予言みたいさ」

「これは予言じゃない。助言だ」

「一緒さ」

「いや、そうでもないぞ」と言っただけレイバーはあぐらを崩し、コーヒーをまた一口飲んでから片膝をついた。「俺は君を救えるからね」とレイバーは自信たっぷりに言った。

「それさえも抽象論に聞こえるけど」と吉村は呆れ気味に返した。「抽象論に聞こえる具体論だ」レイバーは落ち着いた調子で言う。

「じゃあ差し詰め屁理屈つてところか」と言つて吉村はコーヒーをぐくつと喉の奥に流し込んだ。そして歳下のレイバーがどんな反応を見せるのか横目で観察してみたが、予想に反してレイバーは全く落ち付いたままだつた。

「そう聞こえるのも、まあ当然だろうな。当然ついでに、これから俺と君がしなければならぬ事を言つておこう。これからすぐ、俺たちはあるビルの地下に潜つて、リングと格闘しなければならない。だがそのリングはとても逃げ足が速いから…」

「おいおい、『当然ついでに』で許されることと許されないことがある。あんたは二十二だろう？いくらなんでも成人男性に童話を語るなんて馬鹿げてる」

「皮肉なもんだろう？童話レベルの出来事で世界のでっかい歯車が狂わされてるっていうんだからな」

「何の話なんだ」

「ねえ」とレイバーは言つた。それからまた真つ黒の瞳で僕の視線を物理的に支配した。「そろそろ本気で聞いてほしいんだ。俺はずつと真面目な話をしている。信じてくれ。信じられないだろうつてのを百も承知で、俺は君に訴えてるんだから。君だつておとぎ話の強欲なリングなんか運命を歪められたくないだろう？」

済まなかつた、と絞り出すのが吉村にはやつとだつた。本心ではないにせよ、そう答えなければやばいと思つたのだつた。異常なほど体力を消耗し、息が切れ、額にはうっすら汗がにじんだ。レイバーが意図的に超能力的な力を使つているのかどうかは吉村には判断できなかつたが、どちらにせよこの苦しみは二度とごめんだと思つた。「わかつてくれるかい？」と言つて、レイバーはいやらしさのない同情的なまなざしで吉村を見た。吉村はまだ整わない呼吸の合間に残りのコーヒーを無理やり流し込んだ。そして半ば強引に自分の気持ちを落ち着かせて答えた。

「わかつた。ああ、よくわかつたよ。それで、ビルっていうのはどこにあるんだい？」どうにでもなれと思つた。

「ビルの場所は言えない」、「俺が君を連れていくから問題ない」、「スーツは最後まで決して脱がないでくれ」、「何度も言うけど、リングの逃げ足はとても速い」、「君はそれらのうち腐った奴だけを仕留めなくちゃならない」、「君は絶対に逃げ出してはいけなし、逃げ出すべきじゃない」。壁壊しレイバーの理不尽な要求、あるいは命令を吉村はすべて飲み込むことにした。そもそも、壁壊しレイバーの一体どのあたりが「壁壊し」なのかも、結局聞かず仕舞いじゃないか。

吉村は下宿先のアパートから例のビルの地下に到着するまでの記憶が全くなかった。それこそ何かの作り話みたいに、気が付いたらそこに居たのだった。となりにはレイバーがいた。そこには殺気とも呼べるほどの緊張が漂っていた。

「さあ着いた。吉村勇樹君、俺が教えた注意事項はもうすっかり頭に入れただろうね？」とレイバーは緊張気味に、それでいて安定感のある声で吉村に言った。

「スーツは最後まで脱がない。腐ったリングだけを仕留める。絶対に逃げないし、逃げるべきじゃない」と吉村は呪文を唱えるみたいに答えた。

「OK」とレイバーは言った。「その言葉たちは君の武器だ。強力な武器だ。だからそれさえあれば君はリングに負けるはずがない」武器がなければリングに勝てないのか？と吉村は思った。そもそもリングに「勝つ」とはどういう意味なんだろう。

レイバーは地面に備え付けられた金属製のハンドルを両手で力いっぱい回し始めた。そのうちがちゃん、という音が地面の下で響き、その反響音を聞いて吉村は初めて地下の存在を実感した。レイバーはハンドルを持ち上げて、マンホール大の分厚い石の扉を開けた。

「頼んだぜ、リングのこと」とレイバーは言った。「ここから先へは君一人で行く。俺は先に象を調教しなくちゃならないから」

「待ってくれよ」と吉村は焦って言った。しかしレイバーはすでに

吉村の背中をポンと押して、マンホール大の暗闇の中に吉村を突き落とした後だった。武器を取れ、というレイバーの声を落下する吉村は聞いた。

地下は真つ暗だった。だからどれくらいの深さに自分がいるのか、どれくらいの高度から落下したのか、吉村は尻もちをどすんとついた後も全く推測できなかった。ここはどこなんだろう。辺りは自分の鼻息がうるさく思えるほどしーんとして、少しだけ肌寒い。吉村は上を、上と思われる方を向いた。しかし、やはりそこにも膨張した暗闇があるだけで、レイバーがいた跡は全く闇に飲まれてしまっていた。

吉村は身体の勘を頼りに立ちあがってみた。視神経が切れてしまったみたいな重たい暗闇の中で、吉村は孤独だった。実存として孤独だったし、何をするべきかわからないという点においても、孤独だった。右を見ても闇があり、左を見ても闇があつた。でも、そもそもこんな暗闇の中では自分が本当に右を向けているのか、左を向けているのかを確かめる術は持っていなかった。吉村が持っているのは、闇に入る前にレイバーから渡されたいくつかの言葉だけだった。「スーツは最後まで脱がない。腐ったリングだけを仕留める。絶対に逃げないし、逃げるべきじゃない」と吉村はなるべくはつきりと口に出した。

突然、背後からキヤキヤキヤキヤキヤという甲高い声おそくがした。誰かがいる。吉村の鼓動が激しくなった。この闇のどこかに誰かがいる。そしてその誰かは間違いない俺の敵だ。直感で分かった。吉村は自分の鼓動の音が相手にばれないようになるべく落ち着こうとした。でも恐怖や緊張で強張った心臓の拍動は自分の言う事を聞いてくれなかった。どきん、どきん、と鼓動は唸る。闇の中で誰かがキヤキヤキヤキヤキヤと嘲る。空気を裂くひゅうつという音を吉村は聞き取った。と同時に、後頭部に激痛が走った。バットか何かで思い切り殴りつけられたみたいな痛みだ。何かの塊がごとりと地面に落ちるのが聞こえた。吉村はふらつとして地面に左膝をつい

た。それからまた、あの誰かが遠くでキヤキヤキヤキヤキヤと嘲笑した。

吉村は頭にきた。そして獣の慟哭のように唸りをあげ、真つ暗闇に向かつてぎょろりと睨みを利かせた。だが、誰かがどこにいるのかも、それが一体誰なのかも全くわからない。今度は右の脛に激痛が走った。そしてまた同じごとりとという音がした。間隔を開けず、立て続けに後頭部、鳩尾、左脛と激痛が襲った。吉村は唾液を吐き散らしてその場にうずくまった。うずくまった背中に三発、激痛が走る。左の頬に激痛がクリーンヒットする。唇が切れて鉄錆臭い味とする。ぴっちり締まったネクタイのせいでうまく呼吸ができず、全身の骨はぎしぎし軋む。意識が薄れていく。キヤッキヤッキヤと猿が笑った。…猿？そうだ、この声は猿だ！闇に紛れて俺を殺そうとしているのは猿だ。そして、猿の武器は間違いなく、リンゴだ。遠くからリンゴを投げて俺を殺そうとしているんだ。吉村はレイバーの言葉を死にもの狂いで頭に浮かべた。そしてそれを一つ一つ、本当に刃物を研ぐみたいに慎重に口に出した。「スーツは最後まで脱がない。腐ったリンゴだけを仕留める。絶対に逃げないし、逃げるべきじゃない」次第に何の根拠もない力が体中にみなぎってきた。吉村は残りの全神経を研ぎ澄まして、闇の中に立ちあがった。うるから空気を裂くひゅうつという音がした。吉村は百パーセントのヤマ勘でその架空のリンゴを掴みにかかった。

猿は腕が良すぎたのだ。吉村が両手を構えた場所、つまり吉村の後頭部があつた場所に寸分違わず、リンゴは勢いよく飛んできたのだ。パシン、と気持ちの良い音が闇に響き、吉村はリンゴをキヤッチした。リンゴはぐにやりとした手触りだった。腐っている。吉村はリンゴを思い切り地面に叩き付けて、その辺りを勘で踏みつぶした。ぐしゃつと割れる音がした。吉村は腐ったリンゴを仕留めたのだ。リンゴの腐臭が、最期に一矢報いようと吉村の鼻を刺した。ウキヤツと猿は遠くの方でうるたえたようだった。吉村はもう、猿がどのあたりに潜んでいるのかを感覚で把握できていたが、リンゴ

から受けたダメージは予想以上に体を蝕んでいて、これ以上立ち続けることができそうになかった。吉村の身体は地面に崩れ、脱いではいけないスーツのせいで呼吸はいっそう損なわれていき、慣れない暗闇で平衡感覚を保つために擦り減らされてしまった神経では、もはや自分が瞼を開けているのかいないのかも、判別できなかった。どちらにせよ視界には暗闇が広がるだけなのだ。

まだ猿が残っている。あいつは敵なんだ。腐ったリンゴは潰したけれど、猿が残っている限りまだ俺は勝ったことにはならない。吉村は薄れゆく残り僅かの意識の中で、できる限り冷静に事態の分析を試みた。猿をどう仕留めるべきか。残された体力で一体何ができるのか。駄目だった。ただでさえ現実離れたこの事態の解決策を、全身ぼろぼろの自分が思いつけるわけがない。吉村はすでに疲れ切ってしまったのだ。

闇の中から猿が、好機を見はからっていたかのように断続的に鳴き始めた。鳴き声から察するに、猿は吉村を中心に辺りをぐるぐるぐる徘徊しながら、その距離を徐々に詰めてきているようだった。吉村は無防備に倒れこんだままで、猿が独特の殺気押し殺しながらぐるぐる自分の周りを回るのを、ただ感じ続けるだけだった。意識が遠のく程、猿が円の半径を徐々に縮めるその気配ははつきりと手に取る様に感知できるようになっていき、逆にそれが吉村の恐怖を煽った。気が付くと猿は、もういつ飛び掛かってもおかしくないほど近くにいた。相変わらず視界に猿の姿は映らない。嗅覚も腐ったリンゴの死に際の一撃で潰されてしまった。ただ殺気だけが冷冽な足音を立てながら、ゆっくりと、確実に俺の命を奪いに来る。

別の鳴き声が二つ三つ、降ってきた。それはまるで闘技場の殺し合いで賭けをする観客の笑い声のような、醜く、どこまでも腐りきった鳴き声だった。鳴き声の主たちはバサバサ音を立てながら、闇の上空を猿のそれよりも大きな円を描いて優雅に飛び、傍観的な眼差しを地上に注いでいた。吉村は当然その秃鷹たちの姿を視界に捉えただけではないが、暗闇にあって唯一正常に機能してくれる聴覚が、

その推測の正当性を妙に保証してくれた。醜い鳴き声は上空で吉村を弄び、嘲り笑った。「間抜けだな、お前は間抜けすぎる」と言われているみたいだ。そして吉村には、実際に奴らがそう言っているような気がした。でもきつと奴らはいつまでも傍観者であり続けるだろう。奴らが俺にもし万が一攻撃してくるのなら、それはたぶん俺が死んでからに違いない。禿鷹とは悪知恵の塊だ。たまたま翼という高価な武器を手にしただけの、薄汚れたハイエナにすぎない。問題ない。奴らは自分の身の安全と利益を最優先する連中だから。禿鷹に気を取られていたので吉村は猿に気付くのが遅れてしまった。キヤああー！と猿は狂ったように吉村の背後から飛びかかった。猿は並外れた握力で吉村に掴みかかり、その爪を背中肉に食い込ませた。ぐあっ！猿は吉村の首筋に二本の牙を立てた。吉村は咄嗟に腕で首をかばった。間一髪で致命傷を免れたが、牙の傷はかなり深く、生ぬるいどろりとした感触が不気味に首元を這った。噛まれた部分が熱を帯び始める。どくん、どくんという音がいやに闇の中で誇張されていく。やっぱり禿鷹たちは遠くの方でけらけら笑うだけだ。猿は助走をつける為吉村の背中から十本の爪を乱暴に外した。吉村は死を受け入れた。吉村の首筋をさつきよりも大きな温もりが触れた。その温もりは牙でも血でもなかった。それは象の鼻だった。ばちん、と鈍い音を、吉村は聞き取った。という事は吉村は生きていた。象の鼻が猿の身体を弾き飛ばしたのだった。

「ばおおお！」象が勇ましく吼えた。その声に驚いたのか、事態を傍観していた禿鷹たちは焦る様に羽音をばたばた鳴らし、醜い鳴き声を撒き散らして一目散にどこかへ飛んで逃げていった。吉村の血まみれの背中を突然小さな衝撃が襲った。キヤキヤキヤキヤキヤ！猿が鳴いた。猿がまた何かを投げつけているのだ。続けざまに飛んでくる制球力を欠いたそれは、今度は吉村の背中に命中しなかった。象が鼻でそれを全て防いでくれたのだった。もう一度象が「ばおおお！」と吼えたのを確認して、吉村の意識は力尽きた。

「目が覚めたかい？間に合ってよかった」とレイバーがほっとしたように言った。吉村は毛布を払いのけ、ぎしぎし軋む体を無理に起こした。そこは吉村のアパートだった。

カーテンが開いており、窓から朝の穏やかな光が射し込んでいる。

そこには普段と何も変わらない、平和な時の流れがあった。壁壊しレイバーは吉村に親和的な視線を送って言った。

「よく頑張ったね。君はリングたちとともに立派に戦った」

「リング…」吉村ははっと思いだして、左の首筋におそろおそろ手を触れてみた。しかし、そこにはあるべきはずの傷跡のかわりに、鈍痛を伴う青黒いあざが残っているだけだった。同じような痛みは身体のところらじゅうに点在していた。後頭部、胸、鳩尾、両足の脛のあたり、それから背中。背中には、爪を刺されたという記憶こそ残っていたが、その実感は嘘みたいに消え去ってしまった。軽い眩暈がして、吉村はゆっくりと床に横たわった。

壁壊しレイバーは吉村の家の調理器具をまるで自分の家のそれみたいに器用に使いこなし、あっという間にたまご粥を作ってしまった。レイバーは小さなアルミの鍋から粥を茶碗に移して、箸と温かいお茶を用意して、それらをお盆に載せて吉村の枕元に静かに置いた。そして床に無造作に脱ぎ捨ててあった自分のロングコートを簡単に整えて畳んだ。

「ありがとう」と吉村は言った。

「食欲はあるかい？」とレイバーは穏やかに聞いた。

「うん、大丈夫。お茶を貰うよ」吉村は上半身を起こして近くの壁にもたれかかりながら熱いお茶を一口すすった。全身に温かさが伝っていった。しばらくの沈黙をレイバーが静かに破った。

「すまなかった。君を予想以上に危険な目に晒してしまって」レイバーの眼はカーペット敷きの床のどこか一点を力なくみつめていた。その眼差しからは彼が持っている例の超能力的な眼力は窺い知れなかった。レイバーの横顔も少し疲れているように見えた。

「猿がいたんだけど」と、吉村はレイバーの言葉をあえて無視した。

「レイバーは知っていたの？猿の存在の事」

「知っていた。その事はわざと話さなかった。君の仕事は腐ったり
ンゴを仕留めることだけで充分だったから。俺が馬鹿だった。リン
ゴさえ仕留めれば猿は逃げていくだろうと思っていたんだ。甘かつ
た」

「敵はリンゴというより、猿だったんだ」

「その通りだ。そのせいで君に悪い思いをさせてしまった」

「気にしないでいいよ。僕がそれを選んだんだ。僕が自分の意思で
君の話に乗ったんだ」と吉村は抑揚をあえて抑えながら言った。正
直な話、猿に襲われて命を落としそうになった事は、レイバーの責
任がすべてではないと吉村は思うのだった。「実はさ、僕は象に命
を救われたんだよ。一度猿に首を噛まれて、もう一度やられたら終
わりって時にちょうど象が現われた。偶然なのかもしれないけど、
象が猿の投げる何か硬い物を防いでくれてさ、猿を退治してくれた
んだ。禿鷹たちも飛んでいたけど、象の鳴き声で逃げて行っちゃっ
たんだよ」

「俺が連れてきた象さ」とレイバーは無表情で答えた。

「え？」

「俺はその象の背中に乗っていたんだ。君がリンゴと…、いや、猿
と戦っている間に、俺はその象を調教していたのさ」

「ああ！そういえば最初にそんなこと言ってたような。それから僕
を地下の暗闇に突き落した」と吉村は言って、冗談めかしてレイバ
ーを睨んだ。レイバーはちよつと肩をすくめて首をかしげた。吉村
はお盆の上のたまご粥を手にとって、それをすこしだけ箸にのつけ
て、口に運んだ。

「うまい。いけるね、これ」

「よかった」とレイバーは言った。それから吉村が粥を口に運ぶの
をしばらく眺め、それが一区切りつくのを待ってから、言った。「
実を言うと、象の調教にかなり手間取ったんだ。俺はかなり動揺し
ていたんだ」

「何に動揺していたの？」

「象は猿と仲良しだったんだ」とレイバーはかなり真面目な表情で言った。センチンスだけを抜き出すとそれは恐ろしく幼稚な発言だった。象は猿と仲良しだったんだ。吉村は吹き出しそうになるのを何とか堪えた。レイバーは冗談を言う感じではない。

「それで？」と吉村はなるべく冷静を装って尋ねた。

「象は禿鷹とも仲が良かった。それで動揺した。でも俺の仕事は壁壊しなんだ。壁壊しは壁を壊してなんぼだ。だから、象をわざわざ闇の中に連れていっておいて、そこで猿や禿鷹たちと仲良くやらせていたんじゃないか、俺は壁壊しどころか、壁造りを手伝っているようなもんじゃないか。だから君を助けにいく前に、つまり象が闇の外にいる時に、しっかり調教しておく必要があったんだよ。お前はいつまでも猿や禿鷹とつるんでいてはいけない、甘いリングゴやレモンに釣られてはいけない、とね」

「レモン？」

「ああ、さっき君が言った『猿の投げる何か硬い物』とは、たぶんレモンだ」

「どうしてそう言えるのかな？」と吉村は聞いたが、壁壊しレイバーはそれには答えなかった。結局吉村は壁壊しレイバーを最後までつかみ切れなかったのだった。

*

ばたん、と。さあ、めでたしめでたしです。え？ちょっと中途半端な終わり方じゃないのかって？そうですね。確かにそう思われた方は少なくないことと存じます。それは正しいです。けれど、最初にお断りしました通り、このお話というのは何を隠そう「完全ノンフィクション」なのです。つまりどこで切り上げたって、どうせ中途半端になってしまうのですよ。だってそうでしょう？歴史に終わりはありませんもの。それを途中で切らねばならないという事は、

つまりこういう形になるのですね。

今宵はお集まり下さってありがとうございます。もし万が一またこのような機会がございましたら、少なくとも私は皆さんとお会いできるのを楽しみにしておりますのでどうぞよろしくお願いいたします。それでは、これで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4747j/>

壁壊しレイバーの話

2011年1月28日09時23分発行